

チャレンジする 若き農業後継者たち

魅惑の花、ダイヤモンドリリーを
開拓、育種、販売
横山直樹さん

後継者不足といわれる都市近郊農業ですが、新しい農業にチャレンジし、次代を担う農業男子がいます。みなさんに共通するのは3人の子のパパであり、生き方もカッコイイことです。



ダイヤモンドリリーに優しい眼をむける横山直樹さん



ダイヤモンドリリー

清瀬市中清戸、江戸時代このあたりを開拓した武蔵野開拓六家の一軒で、横山直樹さん(37歳)は15代目にあたります。父、暁さんが始めた「横山園芸」をさらに発展させ、ダイヤモンドリリー、クリスマスローズ、原種シクラメンの育種家、生産者として、今では花卉業界ではその名を知らぬ人はいないほどに。NHKテレビ「趣味の園芸」講師、全国への講演会、著作もこなし、日々パワフルに活動中です。

横山さんの圃場で今が盛りなのダイヤモンドリリーは南アフリカ原産のヒガンバナ科ネリネの原種で、陽の光を受けると花弁が金粉を散りばめたように輝くところから、こう呼ばれるようになったそうです。切り花として出荷されますが、年に一度しか咲かず、増殖率が悪く、採算性もつきにくいことから、「きれいな花なのに商売にならない」花でした。南アフリカから英国へ持ってこられ、日本へ渡り、父親が苦労しながら

ら生産したダイヤモンドリリーの開になった時の美しさ。サッカー少年だった頃の横山さんの感動は今も褪せることがないとか。自然の流れのように花が好きになり、専門学校卒業後は父親の憧れだった、園芸最先端の国、英国で2年間研修。「英語も何もかも、ゼロからのスタートでしたが、ここが今の原点。『人生、一生懸命やり続ければ何かに

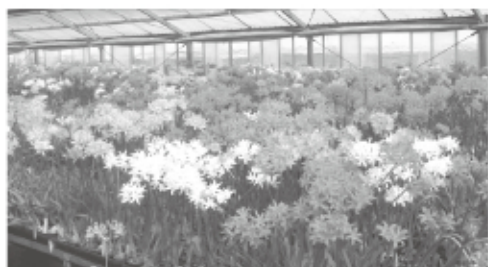
なれる』と感じました」
「父とは違う方向性でやってみよう」と横山さんはビジネスとして成り立たせるために、直接花屋と交渉して販路を広げ、球根の販売などにも着手。あまり注目されていなかったダイヤモンドリリーの価値を高めるために、1本に7〜10輪ついた大輪に改良。また日持ちをさらに1〜2週間延ばした。その上、出荷期が10月の2〜3週間だったものを、11月半ばまで可能にした。これは山上げといい、暑い時期は山梨県の忍野村に運び、花芽が出始めた頃に清瀬に戻し花を咲かせるという方法。「花

に季節をカン違いさせるんです」といいます。途方もない試行錯誤を繰り返して、開花調整に成功したのです。

「大輪にするためには球根にストレスを与えるのも大切で、小さめのポットで栽培します。肥料もほとんどやらない。植物のポテンシャルを最大限に引き出すようにしています」

丁度、スタッフが球根を分球していましたが、最初に開花するのに約4年もかかり、それから8年は花を咲かせ寿命が尽きるそうです。約4万本を出荷し、ウエディングブーケなどにも使われています。

世界で最もダイヤモンドリリーの品種を保有している育種家とされませんが、可憐な上に高貴さも漂うダイヤモンドリリーの裏には、横山さんの計り知れない研究心と情熱が秘め



上・秋の花、満開のダイヤモンドリリー
下・原種シクラメンのポットが並ぶ温室



上・ダイヤモンドリリーの球根
左・控えめで愛らしい原種シクラメン

られていることが分かります。

「原産国でありながら、南アフリカにはダイヤモンドリリーがなく、知る人もいないので、将来は故郷へ返し、産業として成り立つようなお手伝いをしたい」夢は世界へ向かっています。

温室10棟、パイプハウス10棟の中で、社員2名、研修生3名とともに精力的に働く横山さん。温室の中には無数のクリスマスローズの苗、原種シクラメンの小さな妖精のような花がちらほら咲いていました。これら2つの分野の品種改良でもトップランナーです。

「植え替えをしている時が一番落ち着きますね。植物は世話したらただだけ選ってきますから」。これから3月まで繁忙期が続きます。

環境にやさしいバイオディーゼル燃料で 農業に取り組み

當間 隆さん

東京街道沿い、錦城高校裏手に広がる14畝の畑。當間家8代目の當間隆さん（42歳）は野菜や次郎柿、ブルーベリーを生産しています。屋敷奥の畑に一步入ると、空が広く、伸びやかな空間が広がります。子どもの頃はここで泥遊びをしていたとか。

當間さんは就農以前「外に出て勉強したい」とアルバイト先でワインの面白さにはまり、10年程レストランでソムリエをやっていました。しかし「ソムリエは年齢的にいつまでもできない仕事。両親もトシをとってきたので」と跡を継ぎました。

今は次郎柿の最盛期ですが、年間通じて主に根菜類をJA東京むさしの直売所と市内の学校給食に出荷。手塩にかけた安心、安全な野菜です。

この4月から市内の農業後継者で組織する、JA東京むさし小平地区青年部の部長となり、さまざまな活動をしています。「ぼくたちのバイオディーゼルプロジェクト」と名付けた取り組みは、食用廃油を精製して生まれた軽油（ディーゼル）の代替燃



當間さんとバイオディーゼル燃料のトラクター

料をトラクターなどに使用しようとするもの。バイオディーゼルは二酸化炭素や硫酸酸化物の排出がなく、黒鉛の排出量も従来のディーゼルエンジンの約3分の1。環境への負荷を軽減する未来のエネルギーです。

学校給食や市役所食堂から出た食用廃油が18缶缶で10缶集まれば、東久留米あるいは府中の輸送会社へ持って行き精製してもらいます。小平商工会青年部ともコラボして市内の飲食店からの廃油も集めることになり、システム作りが進んでいます。當間さん

がその燃料を使うトラクターを動かしてくれましたが、黒煙も出ず、臭いもなく快適に畑を耕していました。「後継者がなく、相続のため土地を売り、農家の数が少なくなっていく今、先祖代々の土地を維持して守るということは、本能のように自分の中にあります。市民へのアンケートによると多くの人が畑は必要と回答とか。住民の方々の理解を得ながら、子どもにも守ってほしいですね」



右上・畑の奥にはたくさん柿の木
右下・耕した畑は大根畑になる



緑一色の広い畑

人が集う、癒しの 交流ガーデンをつくる 秋田茂良さん

秋田茂良さん、
後の畑がガーデンに



多摩六
都科学館

近く、西
東京市と
の境目にあ
る「秋田

緑花農園」

代表の秋

田茂良

さん(40

歳)は4

人きょうだいの長男で、12代目。「跡を継ぐことを父親から洗脳されながら育ちました。僕も自分の子を洗脳したいと思いますが」と笑います。父親が野菜、小麦の生産の傍ら君子蘭を育てていたので、18歳の頃から漠然と花の道へ進もうと決めていました。園芸の専門学校で学んだ後、大田市場へ就職。2011年東日本大震災後の5月、100人以上の東久留米市民がひまわりの種をプランターに播き、秋田さんら花農家が育てました。花が咲いた7月、それらを福島と石巻へ届けた時の被災地の人びとの笑顔。花が人

の心を癒す力を持つことを実感しました。「誰かが動かなければ変わらない」人の力の凄さを目の当たりにした被災地での体験。湧き上がるものが翌年の「秋田緑花農園」の立ち上げにつながったのです。

「人の心を癒す花と緑を届けたい」とゼラニウム、パンジーピオラ、ヒューケラ、葉牡丹などを生産し、年間約3万鉢を大田市場や全国の花屋に販売しています。こだわりは日本古来の美しい、微妙な色あいの花と緑をすることで、交配、研究を重ねています。「ボサリン」という名の



兵隊さんのように並ぶ
ほうき草ボサリン

ほうき草は淡いグリーンが爽やか。パイプハウスにズラリと整列した様は本当に愛らしく、ナデナデすると柔らかく気持ちいい。「ボサリン」という名前は触った感じを息子さんが表現したのだとか。いい得て妙ですね。この秋から、道路沿いの畑の一部約660㎡に人が集うガーデン造りを始めます。秋田さんの理想を実現する癒しの場。モミジや桜の樹木にあふれる草花。秋田さんの地域活動の仲間とともに手づくりするみんなのガーデンです。それは観光花畑ではなく、日常的に植物を通して人々が豊かにつながっていく場所。「他市からもいらして、ここが南沢湧水への通り道になれば」と希望を託す秋田さん。東久留米の水と緑、そして人びとをこよなく愛する。確実にふるさとの未来を創っていく人です。



ゼラニウム 水やりは地下
15mの井戸水から
左・ブーケのような葉牡丹